

色男止の所世所

67-409
1200501281600

67
409



始

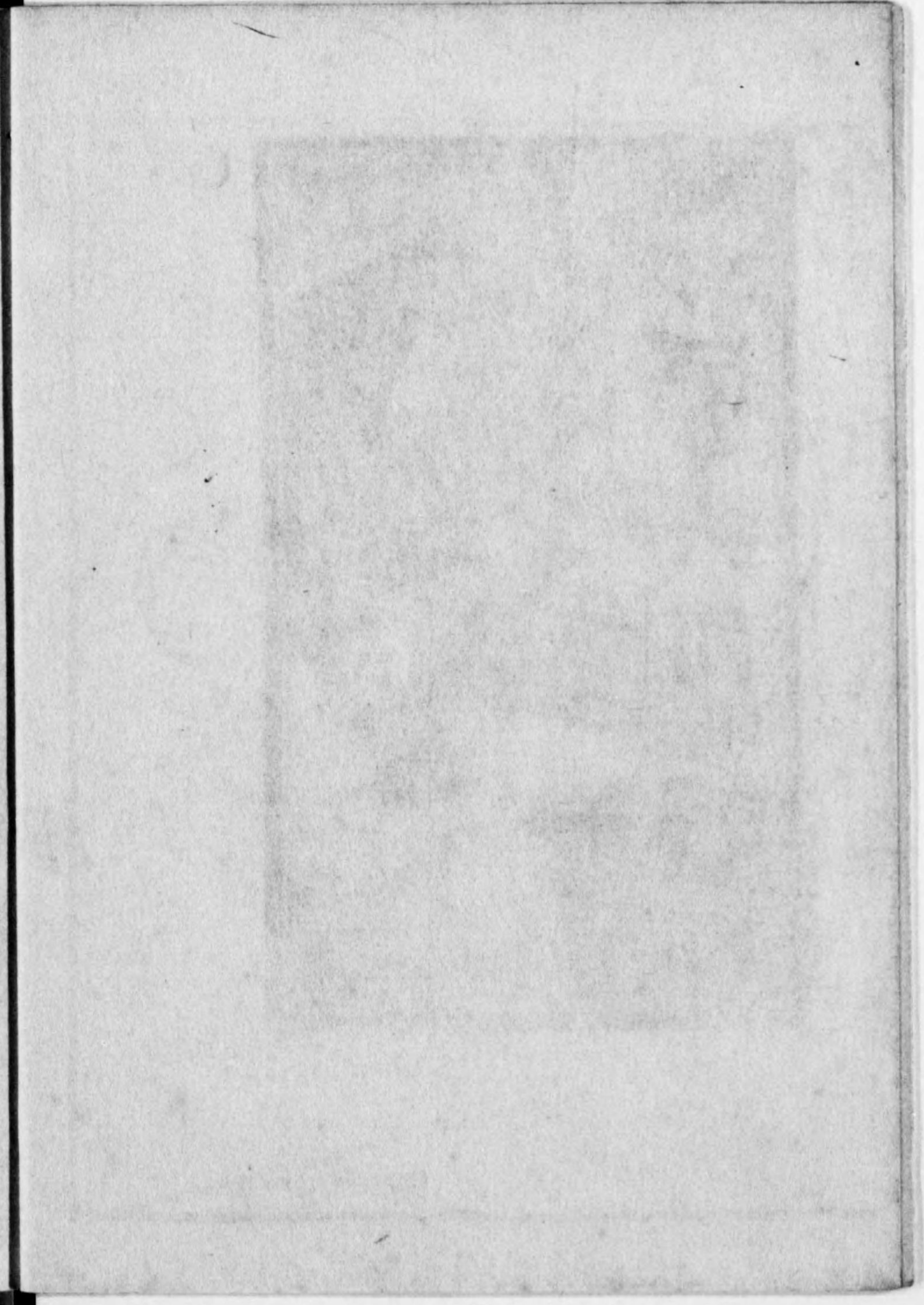


新版

色男正其所行中

元板







かゝるにあらざるもの
あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの
あはれにたゞよふにつ

あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの
あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの



あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの
あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの

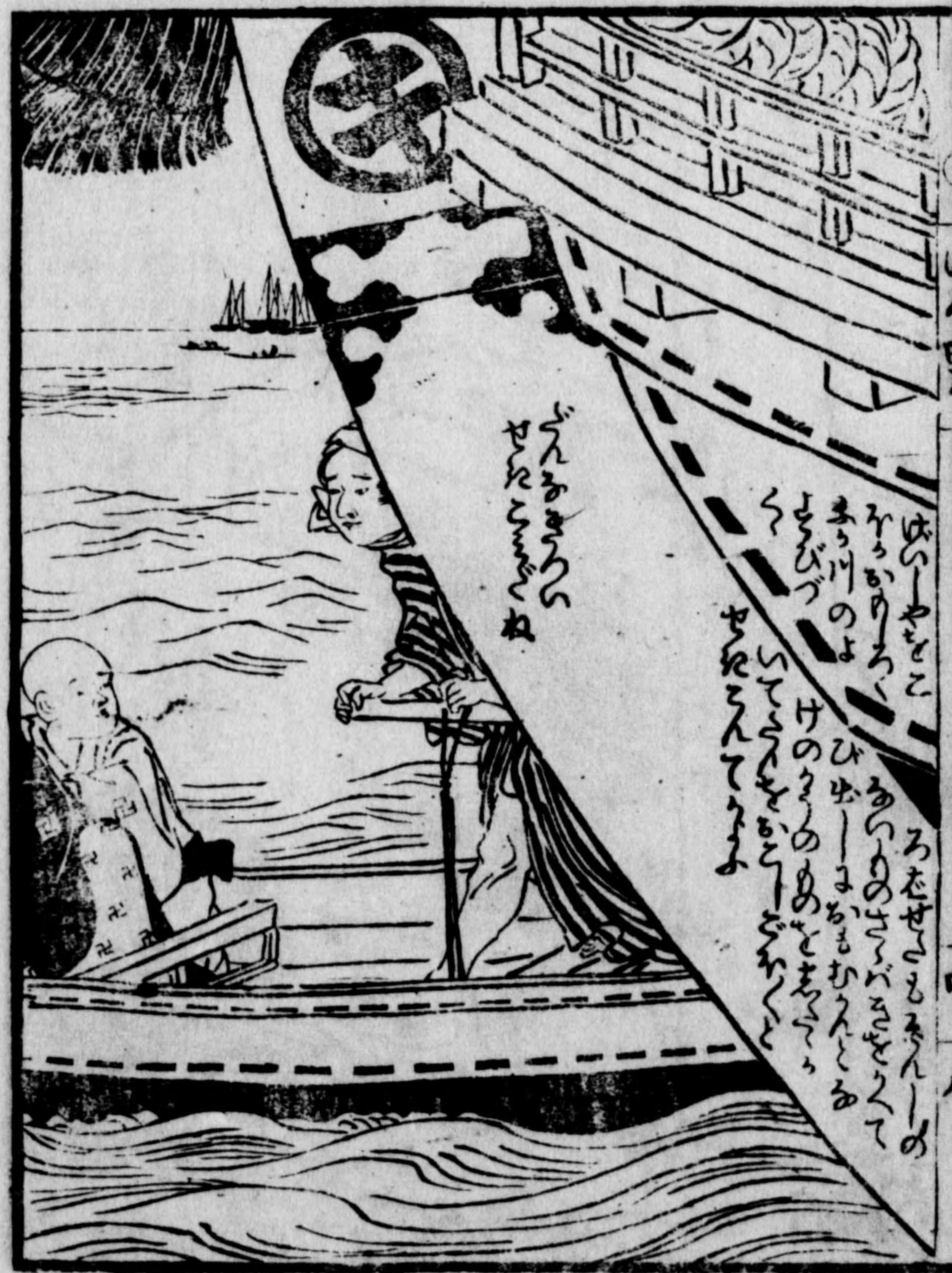
あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの
あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの

あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの
あはれにたゞよふにつ
かゝるにあらざるもの





アのこらひのいぞよま
えんさうちかえんせうが
くらかところごまをせんせ
のんぢやアこれやせんせ
えんさうひがねえあま
せうちさんよあま
ひあまのまーいんせう
てんあひじん
これよじんへま
ややせうちあま
らごつちま
もよひのいぞよま
ちやくとちや



はしーやまこ
やうあひち
まの川のよ
まびつ
サのまのめ
かまへんしんせう
ろをせしむまへんしんせう
あしひのちびるまへんしんせう
まの川ーまもあまへんしんせう
サのまのめ
かまへんしんせう

いんせうのいんせう
かまへんしんせう



あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの



あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの



そのいちかやよの
 ついでのとまけし
 りんぞくこのまじり
 とて入ありののまじり
 うんかのまじりやてのまじり
 あぐらりのまじり
 うらやまーいそよ引

清長画
 万象亭作

森羅萬象作
 鳥居清長畫

いろおとこそこでもここでも
 色男其所此所

上中下
 三冊

原本 東京 加賀豊三郎家所藏

色男其所此所上

こゝに歳徳明きの方に、萬屋與四郎といふものあり、秤目をせしる商賣もなく、借錢もなく、女房もなく、まだ獨身の君隠居、自分では天ッ晴色男の心なれど、うぬに惚れるほど、人が惚れては足れねば、取り占めた色事もなく、ぶら／＼ものにて暮しける。

東西／＼、此所におきまして、作者萬象ちよつと口上を申上ます。

おの／＼様方御機嫌能く、新玉の春を御迎被遊大悦至極に存上まする、従ひまして、此草双紙の趣向は、去春芝の兄分の致されましたる、もんもうづゐの後編のやうなもの、後編でもないやうな、へんてこな双紙でござりますれば、あやの切れぬ所をば、茶に遊ばして、萬が作は無駄でいゝ、他愛のない所が日本だと、相變らず御評判願上奉ります、その

爲め口上左様に思召されませう。

見れば見るほど、おれはいゝ男だわへ、美男妙なるかな〜。

(二丁オ)

頃しも彌生の花盛り、飛鳥山の櫻狩、定めてわれに心ある姫君か、又は箱入の娘なんぞ、櫻の枝へ戀歌の短冊をつけておいたも知れぬと、富の出番を見る如く、此處彼處の短冊を讀んで見れど、切字の無い發句やてにはを知らぬ腰折歌ばかり澤山にて、怪我にも戀歌はなかりける。

おみさん見ねへ、なりはいきだが、不景氣な男だの。

はい〜役者ださうだ。

小僧べんさい。

王子の杉の木にうつてある釘は、みんな俺を呪うのだと見へるが、なぜ戀歌が無いか知らぬ。(二丁ウ、二丁ウ)

或人教へて曰く、とかく色事を稼く氣ならば、女をはるに若くはなしといゝければ、早々淺草觀音へ參詣し、女遅しと待つ所へ、屋敷女中四五人連れにて、御代參にまいりたる中に、すぐれて美しき女中を、無二無三に引倒し、玉のやうなる横そつぼうを、したゝかにはりのめしけるそ苦々しき。

あらが性根にならふかなるまいか、ならふとおしやれ。

ア、これ尾籠な人じやぞ。

私が頼と、頬の低くなりまして、其代りに鼻の高くなりますやうに、

お守り下さりまし、南無お寶頭盧さま〜。(二丁ウ、三丁オ)

かゝる所へ、供の者遅れ馳せに驅け付け、與四郎を取つて引伏せ、したゝかに踏みのめす。力には負けても、口には負けまい、かないやんせん土足さいゑんめいは、どうた。(三丁ウ)

與四郎は、存じも寄らぬ打擲にあひ、身節もかなわず打臥しける、出入りの醫者玄長老見舞に來り、様子を聞いて大にあきれ、色事というものは、さう急には行かぬもの、寄り障りに袖褻を引きなさいとは、古方家のお醫者様とて、御功者く。

屋敷女中をはるとつて、供の野郎にはられました。

しかも握り拳で、雨やはられの降る如くはられました。

それはきつい御災難でござりました、地口でもなんでもない奴さ。

(四丁オ)

玄長老の言葉面白しと、抱への鳶の者に、しやち大綱などを持たせ人通り繁きは、とかく淺草なりとて、廿軒の茶屋を借り切り、目に附いた女の袖褻を引きに出る。

七尺の振袖も引かば、などが切れざらん、板締めの袂も引かばなどかこ

けざらん。

淀の川瀬のさ、やつとこ水車、誰をまつのかさ、くるりやくるりと廻つて頼みます、ひんやアほんやらや。

茶屋の女、茶盡して腹を立つ、これちやよしちやいといふにちや。

鳶の者も負けずにぢぐる、あれはしやちな、これはしやちな。

此仕事がちうれんじでやいで、いゝこつちやアない。

あれさ、此人は何をさつしやる、これさよさつせいよ。

(四丁ウ、五丁オ)

今迄は女の方から惚れるのを待つて居たから、埒が明かすと發明し、江戸中の女に文使ひを雇ひ、文を付けさせる。

これ御用どん、こゝらにいゝ娘はないかの。

向ふのこぢよくと、隣りの子守がいゝのさ。(五丁ウ)

色男其所此所 中

付文をひかせて、而してのち後光を背負つて、ひかりに出てければ、薬研堀に名の高きおゑんといふ踊子、野郎頭で後光を背負つたは、本田義光様ならんと思ひ、手の内を入れるを、扱は俺に惚れたと思ふ。

お志しの女中方は惚れて進ぜさつしやいまし。

ひかアリく、あゝひかり草臥れた。

旦那さん、色事の建立。

これ進ぜやせう。(六丁オ)

よしんば藝者たりとも、色事となる時は、取持ちなふては叶ふまじと棹の先きへ烏麴を塗り付け、おゑんが不動様へ參る所を、ちよいとさいておつとつた。

流石は藝者もさるものにて、兩手をひろげ、ちうくも難有てへ。

通り掛りの夜鷹、鳥指しの文句を聞き、大きにあつくなる。

此くされ鳥さしめ、親にしてもいゝ振袖をとらめへて、おかしな鳥での何んのと、よく毒附きやアがつたな、はつつけ鳥さしめ。

おらが馴染を、なぜ讒訴ひろいだ、此折助鼻柱にかけても、堪忍ならぬといふ、お手まはりだ。(六丁ウ、七丁オ)

餌指しの鳥麴だけ、すつぱり色事になり、此上は轉ばせる一段になりければ、屋根舟、向島と出掛ける、三圍の鳥居先にて、かの藝者がさきへ立つて行く所を狙い濟まして、どふと突轉ばしけるぞ無慘なる。

サアすつぱりと轉ばしたぞ、その轉んだ所を掘つて見やれ、大方金が出やう、それで差引にせうはさ。

まわし黙つてゐろ、手前に一分だぞ。

膝頭があいたいたさは鳥居たちばかりた。

もし旦那御祝儀三分の外、轉び賃が一分でござります。

(七丁ウ、八丁オ)

藝者を轉ばせたも、存じの外面白くないもの、さらば氣を變へて、深川の呼出しに赴かんと、茄子漬の香の物を、したゝか喰いて痰をおこし、ごほ〜とせきこんで通ふ。

旦那きついせきこみだね。

ア、喉が痛い、どふぞ痰切りか、寒生姜といふ所だが、それを飲んぢやア、これほどせき込んだ甲斐がねへ、女郎に承知されよふと思ふも、生優しい苦しみではないわへ、これを思へば野暮で買う方が樂だ、通になるも大體ではない、ごほ〜ごほ。(八丁ウ、九丁オ)

さて仲町尾花屋において、したゝか女郎をかきのめす、その式すべて席

書千枚書きにならへり。

此繪はあとで鬨取りに致して、立會さま方の御手に觸れます。

旦那さんはいんきんだ虫と來て、強敵に書かつしやるぜへ。

おいさまさん見ねへ、とんだいの。

おことさんが合せるやつさ、べつはねへ大津繪のやうなもの。

(九丁ウ、十丁オ)

見物の子供の中、氣に入つたおことといふ子に、兼て用意したる足をつけて遊ぶ、席書の上下にて出遣ひの思入は大でけ〜。

その時高綱大音上げ、さあ〜、ぐつとにらんだり〜。

ついぞねへのふ。

尾花屋の娘、おや〜けしからねへとは思へども、貰つた帯のお蔭がある故、仕様事なしに、やんや〜。(十丁ウ)

色男其所此所 下

深川の遊びも餘りどつとせねば、吉原へ首だけはまつて通ひける、風呂
昇の駕籠の者、仲間の合言葉にて、旦那もいゝ御器量だといひければ、
おもたいといわれる事とは夢にも知らず、大きに喜び、一分づゝはづ
む。

せきこんで通つたより、首だけはまつた方が、暖かくつていゝわへ。

やつさ、ふろはさ。(十一丁オ)

なま物知りの興四郎、何んでも吉原で、一番張り當てんと、頭から女郎
に死んで見せる、太鼓持藤兵衛、めりやすにて呼生ける、同じく五丁三
味線の手附、妙々。

メリヤス旦那呼びけ、旦那様く、やれ旦那様、うつないぞや、これ

のふ旦那合。

こゝは忍び三重がいゝわへ、チ、くく、ッ、くく、がわく
く。

ダア引。

相方の花魁たゝ見ても居られず、禿に言付け呼生けさせける、禿も呼び
やうに困り、耳の端へ口を寄せ、大き聲で、向ふの人引く。

ぬしは花魁にあの通り、死んでお出なさります。

ほんにいゝ心意氣だね。

布袋屋内へほて姫ほてし (十一丁ウ、十二丁オ)

吉原の遊び甚た面白く、これからしては女郎を牽いて遊ぶが、面白味の
最上と地車を拵へ、相方の傾城その外、廻り新造を乗せ、藝者を手古舞
にして、五丁町中牽いて遊ぶ。

ゆふべ夜這人が二階から落ちて、鍋や茶釜、鍋や茶釜がちんからりと鳴れば、猫の真似して、ふんにゆうにや。

新造地車でひかれながら、高尾の長唄 歌「人の眺めとなる身はほんにせんく萬苦の苦の世界、四季の紋日は地車や。」

今の世は心無き新造さへ、かゝる名地口をいうやうになりぬ、實に後世恐るべし。(十二丁ウ、十三丁オ)

何様やら此様やら、ほてのに極まりて通ふ程に、此上はすつぱりとぶち殺す事だと、長さ八尺の鐵の棒を拵へさせ、床の下へ隠置き、お休みなんしたかへと、夜着の中へ這入る所を、ひらりとかはして取て投伏せ鐵の棒にてぶち殺さんとする、此物音に驚き、若い者、遣手驅附け、やうくになだめる、さてくひやい千萬なる事也。

女郎をぶち殺すからは、俺が命も投出してゐる、放せく。

お前様も鐵棒かいな、滅法戒と聞へますか。

へこれはまあ、お口舌でもないから、御了簡なさいとも言はれぬ、何んにせい花魁へ、ほうべたの用心をなさりまし。(十三丁ウ、十四丁オ)

かゝる所へ、亭主布袋屋市右衛門罷出て、實に遊びの魂膽を悉く教へければ、與四郎始めて色事の諸分けを悟り、夫よりして、ほてのが眞の極りとなりける。

市右衛門がせりふ長ければ、茲に略す。

實の事ですが、主は飛んだ頼母しい所がおす。

とかく草双紙の仕舞際は意見か夢だが、貴様の意見は眞の事だ。

今迄のお遊びは、あんまり茶過ぎましたが、全體持前のお心意氣がよふござりますから、段々御稽古ががありますのさ。(十四丁ウ、十五丁オ)

其後、萬屋與四郎は、ほてのを請出し、今日ぞ廓の名残りとして、見送り

の傾城雲霞の如く、ほてのさんあやかり者です、美しいぞよ引。

萬象亭作(花押)
清長 畫
(十五丁ウ)

色男其所此所解説

木村捨三

□
兒童の玩具繪本である赤本から生れた黒本、次で起つた青本を経て、その内容に一線を劃した黄表紙は、その表紙を黄土といふ繪具で塗つたのから出た名稱で、實に江戸文學中、特異の讀み物である。

はじめから讀本の體裁を備へた上方物、即ち文を主に、畫を従としたものに比べて、根本的に相違あることは、江戸文學史の上に、見逃かせぬ問題である。

安永四年版の『金々先生榮花夢』(戀川春町畫作)は、黄表紙の祖といはれても、すべてがその作風に盲從したのでない。舊態依然として實録物や、化物揃のそれを踏襲してゐたものもあつた。しかし大勢の趨く所、『金々先生』もどきの實社會を描いたものが迎へられたので、他の

作者も翕然として、その驥尾に附いていつた。

黄表紙のもつ内容性は、滑稽、洒落、穿ち、それに軽い教訓と、奇想天外な趣向とである。山東京傳は、その作『作者胎内十月圖』(文化元年版)において、黄表紙の立案の始終を、胎児の生長に象どり、その案前案後虚實散の處方を示して、黄表紙の要素を、左く如くに語つてゐる。

- 教訓 三匁意見にて
おろし細末 ○面皮 千枚厚くむ
いて用ゆ ○趣向 一兩 ○工夫 一匁、うその皮
を去りて用ゆ ○案思 一兩
- 地口 三兩、焼直し
て用ゆべし ○故事附 五分 ○小文才 三分 ○智慧 三文
ばかり ○畫意 三匁
ばかり ○氣根 十匁
- 横好 一匁へたを去
りて用ゆべし ○以上十二味、硯の水一杯半入れて器量一杯にこじつける。小雅一ぺき入れる、案じ様常の如し。

なほ、それを盛る醫者の言葉にして「毒だてが肝腎でござる、作者の毒だてと申すは、ちんぶんかんを横啣へにすべからず、故事來歴を生嚙にすべからず、假名違、片言、てにはの誤り、草双紙には許します」といはせてゐるのは、作者が讀者と共に、戯れの世界にひたつて、黄表紙中の人とならうとするのにある。この氣持ちは、ひとり京傳のみではない。

黄表紙家は、讀者を對象として作つたのではなく、讀者と一所に作り、また共に畫くといふ態度は、恐らくこれに筆を執つた畫家も同様であらうことは、二千種近くの類書のいづれにもさうした氣持が溢れてゐると思ふ。

どうして黄表紙といふ作風のもが現はれたか、それは徳川幕府が信奉した朱子學の普遍と外界からの刺戟がないので、人心がすつかり弛緩し、その鬱積するもの諷刺となり、洒落となつた、これを表現するために、繪畫と詞章とが併用される青本の形を假りたのであらう、そこに川柳、小咄、狂歌と異なつた興味がある。

しかし、それだけに作者にも、青本時代とは大分違つた人々が出た、久保田藩(秋田)の留守役平澤平角の朋誠堂喜三二、松平安房守の家士である倉橋壽平の戀川春町など、その著しいものであつた。その他の人々も、多くは天明狂歌の連中であることは注目すべきである。

従つてその作品は、上品な洒落もあり、奇抜な警句もありだが、あまり下級の人々には解し難きものがあつたらう。黄表紙の愛讀者は、恐らく中流階級に多くを占めてゐたと思はしめる。

黄表紙の趣向は、いつまでも一所に留まるを許さなかつた、あゝでもない、こうでもないが嵩じて、遂に政治向きや、時事問題を捉へて、自家薬籠中のものとしたが、その結果は幕府の禁令に觸れ、絶版の厄に遭つた、『文武二道萬石通』(天明八年版)、『天下一面鏡梅鉢』(寛政元年版)、『俠太平記向鉢卷』(同十一年版)等がその主なものである。

そこで作者達は、寛政改革の謳歌と、教訓物、仇討物に轉向したが、その内容の複雑化するに従つて、長編を要するので、文化四年に至つて、合巻が黄表紙に代つて、小説界を支配するやうになり、延いて讀本となつたのである。

その長い間を持續して來た黄表紙の初期にあつて、外側からも聲援したものがあつた。それは役者評判記に擬して、その作に位付けと合評をしたのが發行された。天明元年の『菊壽草』(蜀山人作)、同二年の『岡目八目』(四方山人作)、四年の『江戸土産』(作者未詳)が現存してゐる。かの山東京傳が世間に認められたのも、實にこの評判記に賞揚されたからであつた。

□

本書の作者萬象亭は、森島氏、名は中良、字は虞卿、桂林と號し、通稱を萬藏といつた、蘭

醫桂川甫周の弟で、平賀源内の門に入つて蘭學を修め、また戯作の弟子でもあつた、源内の戲號風來山人、福内鬼外と、天竺浪人を襲ふたが、源内は浪人と書し、萬象亭は老人と記してゐるので甄別される。狂名を竹杖爲輕と呼び、江戸築地に住せるより築地善好とも稱した、別に森羅萬象、森羅子、萬象亭等の諸號を用ひたが、一般には萬象亭で知られてゐる。式亭三馬の書入に、改甫榮とあり、また甫齊ともいつた。畫を喜多川歌麿に學んだことは、蜀山人の『判取帳』に見へてゐる。

萬象亭の名は、安永八年八月結城座に上場した淨瑠璃『荒御靈新田神徳』に、門人森羅萬象をあるを初見とする。その翌九年『金のなる木』を作り、風來張りの文脈で、爾來種々の著作が現れたが、その特長は滑稽味ある黄表紙にあつた。

また一方、洒落本の『田舎芝居』(天明七年版)を作つて、京傳の向ふを張るなど、當代小説家の雄將といふべきである。天明八年後になつて、一時戯作に筆を絶つたのは、兄甫周が醫官として御召出しになつたのと、寛政の改革に遠慮したのであらう。その内に時勢も變り、再び小説に従事したが、最早黄表紙に氣乗りがなく、却て讀本に多くその作を見るやうになつた。

二十五六歳の時から、戯作に筆を執つたが、一時中止する等、割合に作品は尠ない。文化五

年十二月四日歿、享年五十五歳。二本榎上行寺に葬つた。

○

萬象亭作の黄表紙は、天明四年の『萬象亭戯作濫觴』二冊（北尾政美畫）を始めとして、十七種が數へられる。その内『楠無益委記』や『長生見度記』に擬した『夫従以來記』が、最も世に聞へた作品である。

本書は、作者がその巻首にいへる如く、その前年の作『白子屋おこまもゝんぢい』の後編として著したもので、天明七年春、通油町鶴屋版の三冊物である。自惚強い若人の金に飽かして、浮名を買ふと苦心する構想は、京傳の『江戸生艶氣棒燒』（天明五年版）に胚胎してゐる。主人公與四郎が打擲されて着類を引破る所、文使を雇ふ所、勸進に出る所、めりやす高尾を唄ふ所、殊に藝者おゑんの名を用ゆる所、最も相通じてゐる。トゞ吉原にて遊興し、揚屋の亭主の意見にて、めでたしく／＼にて納るは、京傳の所謂「若き時は血氣未だ定らず」（浮氣棒燒）を、本書に「今迄のお遊は、あんまり茶過ぎたが、全體お心意氣がよふござります」に置換へたのである。

前述の如く、黄表紙作家は、自作の中に乗出したのが、その特長であるといつたが、本書もその通りで、色男與四郎の衣類の紋様を、その號萬象を象徴した卍字散らにした。これも『浮

氣棒燒』の主人公艶次郎を現はすに、鼻の低い醜男を以てし、遂に京傳鼻の異稱を得るに至つたのに共通する。

□

畫工鳥居清長が筆に成つた黄表紙は、大凡一百三十種に上つてゐる。安永四年の『風流物者附』、同六年の『糸櫻本町育』等がそのはじめであらう。その諸作中、本書は最も傑出したもので、今回寓目した一百二十種の内から、謂ふ所の代表作として、こゝに選定したのである。

本書は、清長の全盛期といはれてゐる、天明の中頃に畫かれたもので、その繪本における清長の手腕を、充分に見ることが出来る。巻中の活躍せる人物の姿態動作は、錦繪のそれに見る所とは、別個の興味がある。歌麿と並立つた美人畫家鳥居清長を研究するには、本書こそ好き資料といふべきであらう。

清長は、相州浦賀の人、通稱關口市兵衛（或は關新助）といひ、江戸に來り本材木町一丁目、白子屋といふ書肆を營み、鳥居清滿の門人となつた。天明五年、師の歿後、その名跡を繼ぎ、鳥居四代となつた。その畫風は大に行はれて、當時の錦繪や黄表紙の上に影響する所多かつた。文化十二年五月廿一日六十四歳で歿す、本所回向院に葬つたが、いまはその墓は無い。



第 限 定 版
號 版

清長の版畫の名手であるばかりでなく、著作も『風流物者附』をはじめ三十種ほど、それと思はるゝものがある。鳥居派では黒本青本に於ける清經に次く多作家であるが、その何れの作をも粗略に扱はなかつた所に、その人柄をも思はしめる。晩年には草双紙と疎遠になり、寛政以後には、もはやその人の挿繪を見る事が出来なくなつた。(昭和十・五・一)

なほ本書と同時に複版發行せる黄表紙「通増安宅關」同「見訓影繪噺」芝居繪本番附「大鯉海老飼篠塚」は、いづれも清長研究に、必須なる資料であるから参照せられたい。

昭和十年五月十八日印刷
昭和十年五月二十四日發行

清長畫
傑作黄表紙三種ノ内
色男其所此所奥附
定價 一圓

東京市澁橋區東大久保二丁目二百廿番地

編輯者 圖說復版會

代表 木村拾三

東京市神田區須田町一丁目七番地

發行所 巧藝社

電話神田二二九四番
振替東京四〇六六六番

東京市京橋區西八丁堀一丁目四番地

印刷所 巧藝社印刷所

終

